

# 人生の本番はどこにあるのか 「遠くて具体的」な将来を見せる 『夢教育』



学校法人 郁文館夢学園 理事長  
わた なべ み き  
渡邊 美樹 さん

24歳で創業したワタミ(株)をグループ売上1000億円企業に育て上げた渡邊美樹さん。外食だけでなく、弁当宅配事業、農業、環境事業など様々な事業を展開されていますが、根底には常に「教育」の大切さを持ち続けています。2003年に郁文館学園(06年に「郁文館夢学園」に改称)の理事長に就くと、同学園の学校改革に着手。神奈川県教育委員会や第一次安倍内閣教育再生会議、また参議院議員としても教育行政に携わるなど、学校現場、行政、政治の世界から教育改革を進めてきた渡邊美樹さんに「本来の教育のあり方」や郁文館独自のプログラムである「夢教育」について聞きました。

## Special Interview

### 人生の本番をどこに置くか 大学進学が高校生活のゴールではない

郁文館夢学園の経営に携わってから18年を迎えようとしています。私は以前より、就職活動生に向けたセミナーを開催し、多くの大学生と接してきたのですが、これから社会に出る学生たちがまったくワクワクしていないことに気がつきました。「なんのために仕事をするんですか?」「あなたの夢はなんですか?」と聞いても、答えに詰まる学生ばかり。データをとっても、自分の好きなことや得意なことで職業を選び社会へ出る学生は3%ほどなのです。

多くの学生が夢を持っていない。私はこの原因が、偏差値至上主義である日本の学校教育にあると思いました。特に中学・高校の初等中等教育。今の中学、高校は、大学に進学するための教育を行っている。大学に入学することがゴールだから、社会へ出る前にいったん人生が終わってしまうのです。そして仕方なしに社会に出ているのが現実です。

本来、中学・高校は何らかの目的を見つけて次のステップへ進んでいく場。そして大学は社会に出るための準備をする場です。社会に出る時は、これまで学んだことが「ようやく花開くんだ」とワクワクする瞬間でなければならない。教育をそうしたスパンで見直さない限り、日本の未来は明るくないと思いました。

ゴール設定が違えば、教育のあり方も変わります。大学入学がゴールならば点数を取るためにだけの教育でいいかもしれません、夢をかなえる人生をゴールにするならば、社会に出てからが本番です。学力だけではなく、グローバル力や人間力など、本当の意味での基礎の力も必要となってくるでしょう。私が考えているのは、25歳を一つのターニングポイントにした人生設計です。中学から大学までが基礎教育の時間で、そこから社会に出て3年間は基礎経験を積む。そして、基礎教育と基礎経験を経て、25歳でいよいよ夢の実現にヨードンというイメージです。そこから社会の中で必要とされる人間となり、自分の仕事でたくさんの「ありがとう」を得る。感謝を集めつつ、お金ももらいつつ、自分の人生を有意義に生きていく。大切なのは、人生の本番をどこに置くかであり、それを具現化するのが、子どもたちに夢を持たせ、夢を追わせ、夢を叶えさせる「夢教育」なのです。

### たくさんの「いいね」を集めて 世の中の教育を変えていく

私は24歳でワタミを創業しました。その時すでに学校を作りたいと考えていたのです。その背景は、教育の楽しさと

意義を感じた2つの原体験からでています。

私は小学5年生の時に母親を病気により亡くし、その半年後に父親の会社経営が行き詰まり清算してしまったことから、とても貧しい家庭で育ちました。その貧しさから中・高生時代に家庭教師のアルバイトをいつも掛け持ちしたのですが、たくさんの子どもたちを教える中で、人に寄り添い、人が成長していくきっかけを提供できる教育の楽しさを実感しました。

もう一つは、大学生時代にボランティアで養護施設の子どもたちと触れ合ったことです。同じ施設で育っても、子どもたちのその後の人生は全く違いました。ある子は道を踏み外して非行に走り、しかしある子は一生懸命勉強して夢を叶える。一体何が違うのかといえば、ただ一つ、出会った担任の先生の違いです。何か問題が起きた時に、「養護施設の子だから」と疎外するのか、「君の味方だよ」「君を信じているよ」と励まして、背中を押してくれる先生なのか。「担任次第でこんなにも人の人生が変わるのが、教育というものはなんと素晴らしいのだろう」と確信し、いつか子どもの教育に関わる仕事がしたいと思っていました。私の価値観は、生まれてきたからには、より多くの人に多くの良い影響を与えていきたいというもの。子どもに関わる教員、そして学校教育というのは、人の人生に大きな影響を与えるものだと思います。

その後、経営者となり神奈川県教育委員会で教育委員を務め、第一次安倍内閣で教育再生会議にも携わりました。教育現場に実際に身を置いて知ったのは、学校の教育システム自体が、学校や教員の都合を軸に成り立っていたことです。決して子どもたちを軸に教育が考えられていない。学校は子どもたちのためにあるべき場所なのに。

私は2003年より郁文館夢学園の理事長に就任し、学校教育の改革に着手してきましたが、その中で、「子どもが中心の学校づくり」「教員を成長させられる仕組みづくり」「大学進学をゴールとしない教育づくり」という3つを実現していくことを思いました。

政治は税と法律で世の中を変えていきます。一方で経営はビジネスのモデルで変えていきます。教育も同じで、私は郁文館夢学園だけの視点で教育をしているつもりはまったくありません。本学園の夢教育を世の中に問いかけて、「この学校は視座・視点が違うな」とたくさんの「いいね」が集まることで、我々の真似をしてくれる学校を増やす。それによって世の中の教育も変わっていくと考えています。



ID学園高等学校(通信制課程)  
郁文館中学校／郁文館高等学校(全日制課程)  
郁文館グローバル高等学校(全日制課程)



## 引算と割算の教育が重要 固定の常識や価値観にとらわれない 進路指導を

これまで本学園で実践してきた夢教育はしっかりと成果を出しています。これは実際の研究結果にも出ていることですが、例えば難関大学進学者を多数輩出する進学校と本学園の生徒を比較した時に、「自己肯定感の高さ」と「見ているゴール設定の違い」という2つの特徴で大きな違いがみられました。

例えば「君の偏差値はいくつだから進む場所はここだね」というのが一般的な指導ですが、本学園は「偏差値よりもまず、その子が持っている良いところを引き出そう」という教育が前提です。すると生徒は「やればできる」という意識を持ちますから、決定的に自己肯定感が高くなります。

また、他の進学校の生徒はよく、「●●大学に行きたい」という視点を持ちますが、これは「近くで曖昧」なゴール設定ですよね。それに対し、本学園の生徒は、見ている場所が「遠くて具体的」です。「多くの命を救えるお医者さんになりたい」、「みんなに夢を与えるスポーツ選手になりたい」など、一人ひとりワクワクする夢を持っています。本学園の進路指導では、漠然と名前の知っている大学名を挙げるようなことは絶対にさせません。まず「あなたの夢はどこにあるのか」「あなたの人生のゴールはどこにあるのか」という根底がしっかりと意識付けされ、そこから「ではその為に何を学んだらよいのか」「今何をすべきか」などを割り出す、つまり引算と割算なのです。目指すゴールと現状の差を引き算で認識し、そしてその差を日数で割っていくことで計画が立つ。その教育が現状肯定から入るのか現状否定から入るのか、未来型志向か現状志向かという違いは、生徒の成長に大きな差をもたらすでしょう。

では、なぜそうした教育が世の中に浸透しないのか。それは「とは言っても、やっぱり人生は大学で決まる」という保護者や

教員の旧態依然な価値観があるからです。もちろん良い大学に行くことは否定しませんが、それよりも大事なのはその子の人格や生きる力、人間力ですよね。

ですから、その子の幸せを親や教員の価値観で決めないであげてほしい。「通信制高校じゃなくて全日制高校」という常識を持つ人もいますが、別に常識が人を幸せにするわけではありません。その子が本当に向いているものは何かを考えて進路指導をしてほしいと思います。

## SDGs教育に関心の素がある

今の若者が無気力であったり、目標が持てない理由の一つに、日本が豊かな国だからということがあげられると思います。生活が安定していれば、当然「この位の人生でいいだろう」となります。子どもたちにどうやって夢を持たせるか、これは18年前に夢教育を始めてから一番の難題でもありました。

そこで必要だったのが、とにかく社会に関心を持たせること。「人に迷惑をかけなければ何をしてもいい」という生き方は違うでしょう？ 恵まれた環境にいる人は、恵まれた環境にいない人たちに対して責任を果たす必要があると子どもたちにも理解してほしいのです。

では、その責任をどう果たすのか。本学園はSDGs教育日本一の学校を目指していますが、それはSDGs17項目の中に、生徒の社会への関心の素があるからです。SDGsを学ばせることで、生徒の中に「もしかしたらこの仕事で人生が有意義になるかも」「自分が社会の役に立てるかも」という気づきが生まれます。すると、そこから好きなことや得意なことが見つかり、それを基に夢を設定できることにつながっていくんですね。

好きなこと・得意なことは、意志と遺伝です。そこに、もう一つプラスで考えてほしいことが、社会の問題を解決するという意識。好きで得意なことだけをやって、誰からも「ありがとう」と

言ってもらえないのはただの自己満足。だけど、自分の好きや得意を活かしてさらに社会問題も解決でき、たくさんの「ありがとう」を集めることができる、これがSDGsの根本です。SDGsと本学園の夢教育は切り離せないものなのです。

## 通信制高校は「夢教育」に絶対必要 生徒個々の特性や希望に応じた メニューを用意

今回、本学園は通信制課程のID学園高校を開校しました。通信制高校は、我々がやりたい夢教育の延長線上にどうしても必要で、本来我々がやらなければいけない教育システムだったのです。もともと私は、生徒が夢を実現させるために、全日制のカリキュラムが必ずしも有効であるとは考えていません。通信制高校であれば全日制高校の持つ様々な制度上の制約を取り払い、夢実現のために多くの時間を割けるわけです。

私自身が子どもの頃から社長になるという夢を持っていましたから、もし当時このような通信制高校があったら、間違いなく入学し、高校時代にいろんな人に会って、いろんな場所で働かせてもらっていたでしょうね。そのほうがはるかに時間を無駄にすることなく夢の実現に近づける。同じように、すでに明確な夢を持ってどんどん前に進んでいきたいと思う生徒には、ID学園高校で早く人生のフライ汲取をさせてあげたいと思っています。

ID学園高校の開校で、本学園は4つの学校を運営していくことになります。それぞれの学校がそれぞれの特徴を持っています。例えば、すでに起業したい夢を持っているならID学園高校で経営をたくさん学べば良いでしょう。世界を視野に活躍したい生徒は、郁文館グローバル高校をはじめ本学園の留学制度を活用する。一方で、基礎教育よりも実社会で学んだ方がいいと思う生徒がいるならインターンなどに積極的に挑戦してみる。集団行動が苦手な子は、自宅で通信教育をやってみる。



自身も生徒の前に立ち、  
夢実現のエッセンスを伝授する「理事長講座」

その子の特性や持っているものに対して、合う、合わないがあります。私は、学校のために生徒がいるのではない、生徒のために学校があるのだと断言します。そして生徒のためにある学校は、その特性に寄り添うべきなのです。そうするために、ID学園高校では様々なメニューを用意しました。

また、通信制高校では、小・中学校時代に不登校を経験した子どもたちも多くいます。不登校を経験した子どもの保護者と話していると、子どもが学校に行けないことで、なんだかその子の人生がもう終わってしまうかのような感覚を受け取るのですが、そんなことは全くありません。大学進学という近くで曖昧なゴール設定を重視する日本の学校教育が、子どもたちの夢や可能性を奪っているだけであり、その価値観に合わせて子どもの人生を測るのはもったいない。我々ID学園高校では、人生の仕切り直しができます。現在通う生徒たちも、各自が望む環境で学びながら、人生の本当のスタートに向けてそれぞれのペースで準備をしています。また、本学ではオンラインコースから通学型コースへの変更もできますし、一定条件を満たせば全日制課程の郁文館高校への転籍も可能としていますから、そうした意味でも遅れることなく十分再スタートが切れるわけです。それを用意できることが、本学の生徒一人ひとりに寄り添う夢教育の賜物です。ぜひ、希望をもって我々にお子さんを預けてほしいと思います。

## ◆ Profile

### 渡邊 美樹 (わたなべ みき)

学校法人郁文館夢学園理事長・ワタミ株式会社代表取締役会長兼グループCEO。

1959年生まれ。10歳の時、父親が経営する会社を清算したことから「自分は将来、絶対に社長になる」と決意。明治大学を卒業後、経理会社に半年間勤務。その後1年間運送会社で資本金300万円を貯め、1984年ワタミを創業。2000年東証一部上場。外食、介護、宅食、農業、環境など、独自の「6次産業モデル」を構築した。日本経団連理事、政府教育再生会議委員、神奈川県教育委員会教育委員など多数の組織で役職を歴任。2003年に学校法人郁文館夢学園(2006年に「郁文館夢学園」に改称)の理事長に就任。

